

現代学カテスト批判―実態調査・思想・認識論からのアプローチ

まえがき

本書は、現在おこなわれている「全国学力・学習状況調査」（以下、「全国学テ」と略記）の実態を踏まえて、これまでの日本がとってきた学力観を問い直すことを目的としている。問い直しは、三つの視点からおこなわれる。まず最初の第一部では、現在の学力テスト政策は、どのような変遷をたどってきたのか。そして現行の全国学テは、どのような問題をかかえているのかである。私たちはこの考察を通じて、極めて無駄なお金が費やされている現実をみることになる。

次に第二部では、ではなぜこうした無駄が繰り返されるのか。それを明治以降の日本の教育政策と、近代教育の思想展開にみいだす。明治以降の近代教育は、士農工商の身分制度を撤廃する一方で、新たな身分制をつくりだしてきた現実をみつめたい。だれのための学校と学力なのか、それを改めて教育思想の中で問い直す。

最後の第三部では、こうした議論を受けて、現在の全国学テの問題点を、そのテスト内容に踏み込んで明らかにしたい。学力が、なんらかの知識をつけることだとするならば、それはどういふことなのか。今のテスト主義は、

知識中心といわれているが、実際は知識などつけさせていないのではないか。そしてその問題は、結局のところ地方を捨ててしまうものではないのかという問題をみつめたい。ではどうするのか。その処方箋は、もちろん簡単ではないが、これからの社会では、どのような学びが必要なのかを、提案としてのべたい。

さて、いま東京一極集中が続いている。というより、以前より強まっている。それはもう、絶望的とすらいえるほどである。もちろん東京首都圏集中は、いま始まったことではない。戦後すぐから始まったともいえる。とりわけ多かつたのは、一九六〇年代の高度成長期である。しかしその時は、大都市にまだ仕事がたくさんあって、田舎の余剰人口を吸収できた。

しかしいまの東京はどうだろう。十分な仕事があるとはいえないのではないか。非正規でアルバイト的な仕事はある。しかしその収入では、結婚をして子どもを産み育てるには程遠い。これはもうすでに、よく知られたことである。かといって、田舎にも仕事がない。いや、田舎にもではなくて、田舎にこそである。ではどうするのか。本書の著者たちは、それにはより根本的な思想の転換が必要だと考えている。そしてそれには、学力観の転換がともなう。

私たち日本人は、明治の近代学校のスタートから、学力を上げて中央にでて立身出世することが幸せだと思ってきた。明治五年の「学制」では、「学問ハ身ヲ立ルノ財本」と謳われていた。そして福沢諭吉の『学問のすゝめ』では、「人は生まれながらにして貴賤・貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」とのべられていた。「末は博士か大臣か」との明治の思想は、長く続いた身分制度を抜け出すための、希望の合い言葉であった。

だがもうその時代は終わったのではないか。立身出世しても、錦を飾る故郷はもうない。筆者の一人・小笠原の故郷は、青森県八戸市である。一時は、新産業都市として賑わい、日本三大漁港として羽振りが良かった。だが人口二三万を数える八戸市も、地方中核都市の中でも真つ先に消滅する運命にあるという。にもかかわらず多くの地方都市では、いまだに「学力向上」が合い言葉になっている。筆者には、「さあみんな、我が町を消滅させよう」と、かけ声をかけているように聞こえる。

近年のＩＴ産業も最初は期待された。ネットでできるのだから、地方分散ができるのではないかと期待である。だがそれも逆だった。情報・金融を中心とした一極集中のこの知識産業時代では、さらなる集中を引き起こすだけだった。

文部科学省は、東京に集中しないように、大手大学の定員の厳格化を進めている。定員から一人でもオーバーすれば、すべての補助金をカットする方針である。他方で、地方の大学では定員に満たなくても、定員分の補助金をつけるという。だがこれは失敗に終わるだろう。なぜなら仕事が首都圏に集中している限り、学生たちは都内大手大学から都内中小大学にシフトするだけだからである。そうして、地方と首都圏の格差をさらに拡げることになる。

ではどうすれば、一極集中が防げるのか。もちろん筆者らに、その処方箋があるわけではない。おそらく誰であれ、有効な具体策などもつてはいない。だが筆者らは、いまのテスト漬け教育の課題を本書でのべることで、明治以来の思想を問い直したい。

今進められている「学力向上」のかけ声のもとでのテスト漬け教育政策が、いかに無駄なことをしているのか、百害あって一利なしの代表のようなテスト漬け。都内中学校では、国・都・区のテストが年五回もある。通常やつ

ている学校の定期考査五回を含めると、毎月のようにテストをやっている。多額の税金をつぎ込んで、教育産業を儲けさせるだけの、まずはその現状を紹介したい。

その上で、私たちは明治以来なにをやってきたのか、少し歴史も振り返りながら、今の教育の問題点を考えてみたい。そのことで、今の教育が明治以来の体質からほとんど抜け出していないことを明らかにしたい。そこには、子ども一人ひとりをみる姿勢が微塵もない。

そして最後に、あらためてテストの何が問題なのか、その内容に踏み込みながら、「学力日本一」がもたらす弊害についてのべてみよう。社会が急速に大きく変化するこれからの短期的社会では、大きな混乱がおきことは明らかである。すでにそれは始まっている。人々が、そうして地方からばかりか、日本そのものからも出て行く。その現状についても明らかにしたい。

私たちには今、さまざまなスリム化が必要なのではないか。高度成長期以来、日本ではモノを追究することばかりをやってきた。モノを得るには金がある。ならば少しでも稼ぎ出すには、より中央へとなる。学力もそうである。知識を溜め込めば、他人よりもよりよい生活ができる、という強迫観念にとらわれてきた。

だがその時代はもう終わりにすべきではないか。モノばかりでなく、知識もスリム化すべきである。たくさん知識ではなく、より自分に興味のある知識に限定して、より考えることをめざすべきである。これまでの学力観は、より多くの基礎学力をであった。だがそれは、ただただ知識に振り回されるだけであった。

教育は変わらなくてはならない。立身出世から、「いまここに」の一人ひとりの生き方をみつける学力観へと。誰のための教育だったのか。誰のための人生だったのか。ダンシャリをして、自分の生き方を、幸せ観を求める教育へと変わらなくてはならない。本書では、そのことを改めて問いたい。

最後に、現代の学力テストに関する先行研究にも言及しておきたい。学力テスト問題を検討する際には、「日本の学力テスト(調査)」「国際学力テスト(調査)」「教育評価」「学力」「学力と格差」「教育改革」など関連する分野も多い。だが、これらの分野における先行研究を全て網羅することは紙幅の関係上できないので、現代の学力テスト問題を正面から取り上げた学術図書に限定する。なお学術論文だけでなく、学力テストに関する技術的・実践的な内容の図書も除外した。また、本書では現代の学力テスト問題を主たる対象としているので、おおむね二〇〇〇年以降に刊行された学術図書を選定した。しかしながら、表題に「学力テスト」という用語が使われていなくても、内容的に学力テストの問題を扱った図書もあるのが、取り上げることができていない点もご容赦頂ければ幸いである。

まずは、日本の学力テストと国際学力テスト(PISAやTIMSS)、ないしは諸外国の学力テスト問題の比較検証を行った次の先行研究を挙げる事ができる。

福田誠治(二〇〇七)『全国学力テストとPISA—いま学力が変わる—』国民教育文化総合研究所編、アドバンテージサーバー

荒井克弘・倉元直樹編著(二〇〇八)『全国学力調査—日米比較研究—』金子書房

田中耕治編著(二〇〇八)『新しい学力テストを読み解く—PISA/TIMSS/全国学力・学習状況調査—教育課程実施状況調査の分析とその課題—』日本標準

北野秋男(二〇一七)『日米のテスト戦略—ハイスティクス・テスト導入の経緯と実態—』風間書房

山本由美(二〇二五)『教育改革はアメリカの失敗を追いかける―学力テスト、小中一貫、学校統廃合の全体像―』
花伝社

こうした著書は、国際学力テストや諸外国の学力テストとの比較から、日本の学力テストの問題点を指摘するか、批判的に検証したものである。学力テストを実施する上での理論や技術、ならびに問題点や改善点を考察する上では参考となろう。

次に、日本の学力テストの問題を正面から扱った研究としては、次のものを挙げる事ができる。

尾木直樹(二〇〇九)『「全国学力テスト」はなぜダメなのか』岩波書店

荻谷剛彦・志水宏吉編(二〇〇四)『学力の社会学―調査が示す学力の変化と学習の課題―』岩波書店

山本由美(二〇〇九)『学力テスト政策とは何か―学力テスト・学校統廃合・小中一貫校―』花伝社

志水宏吉(二〇〇九)『全国学力テスト―その功罪を問う―』岩波書店(岩波ブックレット)

志水宏吉編著(二〇二二)『学力政策の比較社会学―国内編―』明石書店

志水宏吉・高田一宏(二〇二二)『全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』明石書店

いずれの研究も、現状の学力テストそれ自体を批判的に検証するか、もしくは学力テストがもたらす学校現場や教育実践への様々な影響を考察した内容となっている。

以上のような先行研究と比較した場合、本書の特徴として挙げるべき点は、以下のようになる。

第一には、全国ならびに地方の学力テスト体制の実態をふまえつつ、現代の学力テストの問題点を検証し、あ
るべき学力向上策の方向性を検討したことである。

第二には、わが国の学力テスト政策の現状と課題を制度・政策面から論じただけでなく、教育思想・哲学、な
らびに学力論から原理的・理論的に分析しテスト政策とは異なる教育実践のあり様を、状況的学習論や言語論的
転回以後の知識論といった新たな知見から再検討したことである。

第三には、教育学ではこれまで問われることのなかった、より根源的な認識論の視点からテスト問題のあり方
を批判的に考察したことである。これまでの学力論は観念的な概念論か理念論に終始していたが、本書においては、
知識が確かに知識といえるものであったかどうかについて正面から議論することを試みている。

本書が先行研究とは全く異なる独創的な内容となっている点は、この三つの特徴からも明らかであるが、同時
に学力テストの将来的なあり方だけでなく、日本の教育のあり方、社会のあり方にも言及し、日本の進むべき道
筋も検討したことである。本書を通じて、多くの読者が学力テストのあり方と日本社会の関係を再考する機会
を持つて頂ければ、執筆者一同の望外の喜びとなろう。

第一部 「現代学力テスト政策」の現状と課題

第1章 「学力テスト政策」の問題点

1 世界の学力テスト政策の潮流

世界の学力テスト政策の実施状況／イギリスのテスト政策／アメリカのテスト政策
NCLB法の制定／ラビッチのテスト政策批判

2 問題点の多い「全国学力・学習状況調査」

変化のない全国学テの結果／全国学テの実施状況／テスト専門家の指摘

3	学力テストに要する多額の費用	20
	初年度は一〇〇億円／地方学テの実施状況	
4	学力テスト「日本の常識、世界の非常識」	25
	PISA・TIMSS・NAEPの実施状況／全国学テの特異性	
5	繰り返される学力テスト	30
	地方学テの実態と特色／テスト会社に依存する地方学テ	
第2章 なぜ「学力テスト政策」は普及・浸透したか		
1	学力テスト政策の「第一期」(発生の前段階)	39
	「ゆとり教育」による学力低下／「ローカル・オプティマム」の実現	
2	学力テスト政策の「第二期」(地方学テの拡大)	43
	二〇〇三年以降に始まる地方学テ／二〇〇三年の「PISAショック」	
	国家版「教育アカウンタビリティ」の構築／「PDCAサイクル」の構築	
3	学力テスト政策の「第三期」(全国学テの実施)	50
	「全国学テ」の実施／「地方学テ」への影響／目指せ！世界のトップレベル	
4	学力テスト政策の「第四期」(地方学テの蔓延)	56
	「結果公表」の自粛／文科省の方針転換	
5	学力テスト政策の「第五期」(学校・教員評価)	60
	「悉皆調査」に変わった理由／目的は「学校評価」「教員評価」	

第3章 学力テスト政策の歴史的構造……………67

- 1 実現不可能な学力テスト政策……………67
 - 「世界一の学力」を指して／石原都知事の大号令
- 2 東京都特別区における学力テスト政策……………73
 - 荒川・足立・品川の実情／注目すべきは世田谷区
- 3 学力テスト政策の全国的動向……………77
 - 橋下府知事の教育改革／ランキンゲ化される都道府県／沖縄の悲願
- 4 学力テスト政策の歴史的構造……………83
 - 戦後の「ナショナル・テスト」の歴史／戦後の「ローカル・テスト」の歴史的構造
- 5 学力テストと能力社会……………88
 - グローバル社会における学力／本書の主張の再確認／取り組むべき優先課題／他分野との連携・連帯

第II部 何のために学ぶのか？……………99

第4章 テストが格差をつくりだす……………101

- 1 学歴社会と立身出世……………101
 - 立身出世と国力向上／福沢諭吉の本当の教え／学制と学歴社会／学校への依存

2	学校が格差をつくる	110
3	試験で実力は測れない？／再生産論の衝撃／学校は格差を縮めない／メリトクラシー社会の悪夢	120
	「ゆとり教育」と競争原理／学力向上は国力向上か？／可視化される監獄	
第5章 学校知の限界と可能性		
1	参加こそ学び？	131
	状況的学習論／ゼミならではの学び／モデルと現実の間	
2	知識とは何か	137
	知識は「世界の写し」か／言語論的転回以後の学習観／デカルトの世界とハイデガーの世界	
第6章 書くことは世界を変える		
1	自由になるために書く	147
	『フリーダム・ライターズ』／教育は自由をもたらす／クラスだけは別世界	
2	自分の頭で考える	152
	『山びこ学校』／大人と別の世界を生きる	
3	啓蒙の実践共同体	156
	僕らが旅に出る理由／古典を読む意味／カントの末裔たち	

第7章 考えてはいけない日本のテスト

- 1 はじめに―姉弟のある夜の会話……………166
- 2 自分で考えてはいけない／解釈以前の多くのテスト
学力を調べていない全国学テ……………170
- 3 「豊かさの排除」「思考の妨害」「解答不能」／活用になっていない活用型問題／なにを計ろうとしているのか
それは国語だけの問題ではない……………185
- 3 考えさせない教育／知っているとはどういうことか……………185

第8章 地域をすてる学力

- 1 極点社会の到来……………191
- 2 そしてだれもいなくなる／日本創成会議の試算
学力日本一・秋田の現実……………194
- 3 若者が戻ってこない／田舎をすてる学力問題／学力日本一、そしてだれもいなくなった
東井義雄の「村をすてる学力」……………200
- 3 普遍妥当な学力と生活に生きる学力／知識は生活の中で確かめられない／経験でテストできない知識……………200

4	知識を知っているとはどういうことなのか	207
6	4 普遍妥当な知識とは／知識の普遍性は文のつながりで保証される／理念で語れてきた従来の議論 6 そして誰もいなくなった 田舎を捨てる理由／悪しき点数主義／主体性を失った学びの行く末	213
第9章 これからの学力		
1	人工知能とこれからの教育	223
2	1 モノ的知識観との決別／人工知能が仕事を奪う／知識への新たな視点／知識はかかわってこそおもしろい 2 変わる入試・変わる学力観 中教審答申の現状認識／大学入試改革／公正・公平な評価とはなにか／知識から思考力へ	232
3	3 これからの学力へ 博物館など多様な場での探究的な学び／学習観・学力観の転換	241
	あとがき	247
	人名索引	251
	事項索引	253

執筆者紹介

北野秋男（きたの あきお）

日本大学文理学部教授・日本大学大学院総合社会情報研究科教授
博士(教育学)、教育学専攻、1955年富山県生まれ

〈主要著作〉

編著 2006 『日本のティーチング・アシスタント制度—大学教育の改善と人的資源の活用—』東信堂。

編著者 2009 『現代アメリカの教育アセスメント行政の展開—マサチューセッツ州(MCAS テスト)を中心に—』東信堂。

単著 2011 『日米のテスト戦略—ハイスティクス・テスト導入の経緯と実態—』風間書房。

編著 2012 『アメリカ教育改革の最前線—頂点への競争—』学術出版。

編著 2015 『こうすればうまくいく！地域運学校成功への道しるべ』ぎょうせい。

単著 2015 『ポストドクター—若手研究者養成の現状と課題—』東信堂。

下司 晶（げし あきら）

日本大学文理学部・大学院文学研究科教授
博士(教育学)、教育哲学・教育思想史専攻、1971年栃木県生まれ

〈主要著作〉

単著 2006 『〈精神分析的子ども〉の誕生 —フロイト主義と教育言説』東京大学出版会。

共編著 2014 『教員養成を哲学する—教育哲学に何ができるか』東信堂。

編著 2015 『「甘え」と「自律」の教育学—ケア・道徳・関係性』世織書房。

共編著 2016 『教員養成を問いなおす—制度・実践・思想』東洋館出版社。

単著 2016 『教育思想のポストモダン—戦後教育学を超えて』勁草書房。

小笠原 喜康（おがさわら ひろやす）

日本大学文理学部・大学院文学研究科教授
博士(教育学)、教育認識論、博物館教育論専攻、1950年青森県生まれ

〈主要著作〉

編著 2017 『哲学する道徳—現実社会を捉え直す授業づくりの新提案』東海大学出版部。

単著 2015 『ハンズ・オン考：博物館教育認識論』東京堂出版。

編著 2013 『博物館情報・メディア論』ぎょうせい。

編著 2012 『博物館教育論—新しい博物館教育を描きだす』ぎょうせい。

単著 2009 『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書。

単著 2008 『学力問題のウソ—なぜ日本の学力は低いのか』PHP 研究所。

現代学力テスト批判—実態調査・思想・認識論からのアプローチ

2018年1月10日 初版第1刷発行

[検印省略]

*定価はカバーに表示してあります。

著者◎北野秋男・下司晶・小笠原喜康 発行者 下田勝司 印刷・製本／中央精版印刷株式会社

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒113-0023 TEL 03-3818-5521 (代) FAX 03-3818-5514

発行所
株式会社 **東信堂**

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023 Japan

E-Mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

ISBN978-4-7989-1466-4 C3037 ©A. KITANO, A. GESHI, H. OGASAWARA